

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成23年11月18日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 京都大学医学研究科

職 名・学 年 修士課程2年

氏 名 米盛 由以子

助成の種類	平成23年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成	
研究集会名	第67回 米国生殖医学会総会	
発表題目	性同一性障害者の生殖補助医療に関する意識調査	
開催場所	アメリカ合衆国 フロリダ州 オーランド オレンジカウンティコンベンションセンター	
渡航期間	平成23年10月14日 ～ 平成23年10月21日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円
	使用した助成金額	200,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空券代
宿泊費		21,310円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 助成が決定するまでのプロセスがスムーズで、情報提供のHPも分かりやすく、大変申請しやすかったです。また、助成金が振り込まれるタイミングがちょうど一か月前でしたので、航空券を購入する際に、ちゅうどのタイミングで助成金をそのまま利用することができました。もうあと一週間早く振り込みされていたら、もう少し余裕をもってチケットを購入できていたかもしれません。しかし、貴財団のお力添えで安心して学会で発表することができました。本当にありがとうございました。	

この度は国際研究集会発表助成を採択していただき誠にありがとうございました。私はアメリカ合衆国フロリダ州オーランドオレンジカウンティコンベンションセンターにて行われました第 67 回米国生殖医学会総会にて「性同一性障害者の生殖補助医療に関する意識調査の解析」を発表するために貴財団より助成金を賜りました。

米国生殖医学会総会（通称 ASRM）は、アメリカにおいては生殖補助医療に携わる専門家が皆参加している学会であり、産婦人科医のみならず、精神科医、小児科医、内分泌科医、看護師、助産師、保健師、ソーシャルワーカー、臨床心理士、胚培養士等さまざまな分野で活躍の方が参加しており、さまざまな視点で意見交換がなされています。日本国内では、法律などの規律が多くセクシャルマイノリティの生殖補助医療に関しては行われていないのが現状ですが、アメリカにおいてはゲイ、レズビアン、トランスジェンダーの方に生殖補助医療を用いて家族計画を進めていくというような治療が整いつつあります。また、日本からも患者がやってきては治療を行っているというような話を聞くことができました。

日本国内においては、そもそも性同一性障害者は精神科治療を受けていますが、次に発表されます DSMV においては、性同一性障害ではなく、性違和というようなニュアンスに緩和される予定です。性同一性障害を障害として捉えるのではなく、「一状態」に緩和されるということです。他の精神疾患からは除外されるということにより性同一性障害者の社会的な地位というのは見直されていくだろうと予測できます。性同一性障害者は性転換手術を受けることにより自らの性を変え、今では性別変更を行うことも可能となってきましたが、その代りに自らの生殖能を失ってしまいます。そのような大きなリスクを与えられることの説明を受けているにも関わらず私の研究結果からは、自ら家族を持ち、子供を持ちたいと思っている人がほとんどであるという結果がでています。日本国内において、臨床心理士がどの程度そういったことに対して説明を行っているのか、そういったところを今回は質問されましたが私はそういったところについて詳しくないことに改めて気付かされ、日本における臨床心理士、心理カウンセラーの介入について現状を知るべくそういった切り口から今後本研究を深めていかななくてはならないと感じました。

私の発表以外に、シンポジウムまた、post graduate course において、朝から夕方までいただいた 5、6 コマの講義を受ける機会がありました。その中で、セクシャルマイノリティの方の治療がこれまでどのように行われてきたかというアメリカを中心とした歴史について、また現在行われている治療について、詳しく勉強することができました。さまざまな論文や著作が発表の中で盛り込まれていたのが大変興味深かったです。性同一性障害の原因は現在のところまだわかっておりません。治療としては、患者の言動を整理した問診からホルモン療法や手術が行われていくというものにとどまっています。原因が分かっていないために、理解されにくい疾患であることは間違いありません。家族の中で親は、自らの子供が性に対して不快感を感じていたり、学校の教育現場では先生から見て自らの生徒がそうであったり、生徒からすれば友人にそういった人がいるということで、周りでサポートする人々が混乱している傾向も日本にはあります。性は閉ざされたものであるというような考えが日本にはまだまだ根強いです。そのような人たちの理解を深めるためにはどういった対処方法があるのか、どういった症状が現れるのかについて詳しく書

かれた本も紹介されていたので、それをもとに日本人向けの指導書を作成することにもつながって行くのではないかと考えています。

精神科医療においてアメリカの医療からは日本はだいたい 10 年は遅れているというのは今までにも聞いたことがありましたが、それくらいアメリカはどんどん前に突き進んでいこうとしていることを肌で感じることができました。そういった、猛進型の医療は日本には向いていないと思うので、慎重に進めていくべきではあると思います。ましてや、生殖医療というのは次世代育成に強くかかわっていく分野であると思いますので、チーム医療が欠かせないと感じます。そのため議論を活発に行い、患者の求めている状態によりすり合わせた医療の実現をそれも日本らしいものを確立していかなければいけないと思うようになりました。来年からは私も助産師として病棟で働く予定にしています。この度 ASRM で得た知識をぜひとも今後に生かしたいと思います。繰り返しにはなりますが、このような機会を無駄にすることなく実行することができましたのも貴財団のおかげです。誠にありがとうございました。